

闇の向こうへ

伊藤正雄

夜空にそびえ立つ駅ビルの明かりに背をむけて立つと、灯りの消えたロータリーの漠然とした広さが、まるで未知の場所に来たような、寒々しさを感じさせる。冷えた夜の空気の中で、目の前のコンコースを囲む四、五本の古びた街路灯が、やっと自分達の出番が来たかのように、広場をわずかに照らし出している。駅前とはいえ小さな田舎の市である。もう寝静まった駅前商店街では、それぞれの店の前で白い光を放っている広告灯が、ロータリーの向う側から先に点々と一直線に続いている。ロータリーと商店街とを結んでいる石畳の道が灰白色に、雲に隠れた月の朧光をつけて浮き上がって見える。

こんなに遅く帰るのは、ここ十数年間では始めてかなと、酔った頭で考えた。淡く緩慢に流れる時の心地良さに浸りながら、しばらく駅出口の壁に寄りかかり、通勤で毎日通い見慣れたはずの風景に目をやっていた。一緒に電車から降りた乗客たちは、一部は別の出口に向かい、こちら側に来た者も、目の前のロータリーにやってくる迎えの車に乗って、次々と去って行った。

私は、ぬくもり始めた壁から身を剥がし、人影が消えた駅前をやっと歩き出した。ロータリーに沿って反時計回りに半周すると、そこから道を隔てた向う、商店街の入り口に、いつものバスの乗り場がある。足取りは覚束ないが、早春の夜気は、冷たい中にもほんのりとした暖かさを感じさせ始めている。

今夜の酒はあまりよい酒ではなかった。無料酒を飲ませてやるという懇知の営業部長の誘いに乗ったのがそもそも失敗だった。技術がわかるという取引先の接待に、技術担当として同席して、相槌を打っているだけで良かったはずなのに……。

最初のうちは営業部長と儀礼的な会話をしていた接待相手も、飲みが進むにつれて、ひけらかすように自説を展開し始めた。そして話の区切りごとに、私に同意を求めてきた。大事なお客様だということで、正面切って反論するわけにもいかず、かといってまったく

手前勝手なお説に、無責任な同意もしたくない。はじめから承知していたこととは言え鬱屈した気分になり、酔いがすっかり体の奥に埋没してしまった。それでも注がれるままに飲み続けなければならぬ。よつやく開放されて、ひとり帰りの駅にたどり着いたときに、再び酔いが頭をもたげてきた。暖まった車中のまどろみの中で、我が家のあるいつもの駅にちゃんと降りられたのは、少ない乗客のほとんどが、いっせいに下車したからだった。

ロータリーを半周し終えるあたりで、ふと前の方を見ると、バス停にはもうバスが停まっ
っているではないか。

慌てて走ろうとした私の右足と左足は、お互いが同時に先を競い合い、絡み合ってしまった。気持ちだけを前に投げ出して、肉体はなんの支えも無く、そのまま石畳に打ち付けられた。前かがみのまま、先ず前頭部が、全身を背負ったまま歩道の縁石に激しくぶつかり、熱い衝撃に見舞われた。頭中が真っ赤な激痛に占められた。続いて肩に、胸に、体全体に、硬直していくような圧迫感が襲った。それは、酔いで幾分不快だった体の奥の方から徐々に、心地よさへと変わっていった。全身をうつ伏せて横たわったまま、動こうという気力は無かった。ざらざらした路面の冷たさが頬から伝わり、ほてった顔をくるんできれる。このまま大地に溶け込んでしまいたい。

「でもバスが来ている。」一瞬間の後、自身の内からの呼びかけに蘇らされた。思い切っ
て立ち上がると、頭も体も、もうそれほどの痛みは感じない。そのまま小走りにバス停に向かった。いつもは注意して横切らなければならなかったバス停前の道路には、右にも左にも車はおるか動くものの影もない。そのままの勢いで通り抜け、目の前のバスのステップに足をかけた。

バスの中は、橙色のライトが明るかった。すでに二、三人の乗客がいた。二人掛けのシートに一人でゆっくりと腰を下ろした。乗り込んでくる者は、もう誰もいなかった。バスは、扉を閉めると、黒い帳が降りたような闇の中へ発進していった。

煌々とした車内灯を浴び、広くゆったりとした空間で、暖かい毛布にくるまれたような安らかな気分になった。バスの小刻みな振動が、眠気に拍車をかけた。体中の気が、スーッと抜けていくようだった。穏やかな暖かさ、優しい明かりが、全身を包み込んでくれる。降りるところは終点の近くだと言う安心感も手伝って、いつの間にか深い眠りに落ちていった。

どれくらい経っただろう。ふと目を覚まして周りを見ると、誰もいない。乗客は私一人になっていた。窓の外に目をやる。相変わらず真っ暗である。さらに目をすえてガラスの向うを見た。模糊とした頭の中で、寒々とした黒い風景が後方に流れていく。ここはどの辺だろう。見慣れた通勤路の景色を探した。どうもよく思い出せない、あの建物、この林……。どれも見覚えが無い。

その時、私の頭は急にはつきりした。『しまった、間違ったバスに乗ってしまったのだ。』駅前バス停には、いくつかの路線が入り込んでいたんだ。どこにいくバスに乗ったのだろう。家に帰らなければ……。このままでは帰れない。慌てて降車ボタンを押した。しばらくして、バスは無言のまま、闇の中に停まった。

下車した私の顔を、夜の空気がヒヤツと覆いくるんだ。真っ暗な中に降り立った足元の部分だけが、バスから漏れる光でデコボコのある古い舗装道路だとわかった。明るい車内から出た私に、周りの闇は永遠に続く黒一色の世界だった。その真ん中にポツンと立たされたような錯覚になった。果てしなく広がる黒い闇の中に、点のような私が、一つ存在しているに過ぎないような……。

振り返るとバスは、今日の最終便であることを示す赤い表示と、黄色いテールランプを燈らせて、闇の中に発進して行くところだった。白っぽいボディの輪郭が遠ざかっていき、次第に闇の中に埋没していった。最後まで見えていた赤い表示灯と黄色いテールランプも、いつの間にか一体となり、そして点となり、その光も暗闇に消えていった。

周りをそおっと見回したが、見覚えのある通勤路と結びつく雰囲気すら感じられない。やっぱり乗り間違えてしまったのだ。

しばらくじっとしていると、漆黒の中に取り残されたはず私の眼にも、徐々に周りの形が黒い影となって浮かんできた。広い道路の向うには、針金を巻きつけたような塀が、道に沿って延々と続いている。その奥に、闇の中に黒々と横たわっている巨鯨のような建物の影が見える。工場の廃屋なのか、死んだように静まり返っている。守衛所だったのか手前の門らしきところにある小さな建物の壁板は、剥がれかけているのだろう、時々通り過ぎる風に何の抗いも無く揺れている。

遠くの闇から近くの闇に目を移すと、右手の後に一軒の小屋らしい影が浮かびあがっている。昔は小さな駄菓子屋かタバコ屋だったのだろうか。道に面したガラス戸は、そのほとんどもが割れている。トタン屋根は一部が外れ、そういえば先ほどからカタンカタンと乾いた音がしていたのはこれだったのか。生い茂ったまま立ち枯れた草が、小屋を取り囲ん

でいるようだ。次第に体が冷えていく。

闇の中でも見えるこの風景、そんなことはあるはずが無いと思いつつも、どこかで見たような気がする。最近ではない。子供のころだったか？高校生時代？中学生時代？小学生時代？さらにそれ以前……。いや、自分の育ったどこにも、ここを想い起させるところは考えつかない。記憶のない赤子のころ、どこかでこんなところに連れて行かれたのだろうか。それとももつと以前、母の胎内にいたこの間接体験の表出なのか。

夜気の冷たさが、肌を通してさらに体の奥にまで伝わってくる。バスの中でもらった温もりは、とつと外に外の空気に持ち去られてしまっていた。相変わらず覆い包んでいる闇の中に、これら以外のものは見えてこない。この闇の中を進んで行けば、そのうち人家が見つかるだろうか。しかし人の気配はどこにも無い。そうだ、乗ってきたバスは行ってしまったが、逆方向の最終バスがまだあるかもしれない。

道の反対側に渡り、バス停のポールを探してみた。しかし暗闇の中に見つからない。バスが来なくてもほかの自動車を通るかも知れない。廃屋工場の門だった辺りでしばらく待った。三月はじめの夜風は、まだまだ冷たい。コートの襟を立てた瞬間の暖かさはすでに無くなり、時折吹く風に背を向けながら立ち続けた。しかし風のほかには何も来なかった。私を除けば、生命の気配もなかった。

明日も出勤しなければならない。ここはどこなのかわからない。今夜、自宅に帰れなかったなら……。小さな小屋の中でうずくまって一夜を過ごして、朝一番のバスで駅まで行くか？冷たい風が凍えるような音を出して、小屋を鳴らしていく。それとも工場の廃屋の中で、明るくなるまで待つか？黒い大きな建影が、まるで他所者を拒むようにそびえて見えた。

期待は消え去っているのに、思いをめぐらしながらも私は、ずっと前にバスが去って行った闇を、じつと見つめ続けていた。なかば絶望を帯びた瞬きをしたその目に、ほんの小さな、赤い点が見えた気がした。なおもじつと見つめ続けていると、動いてもいず近くでもないが、たしかに明かりには違いなさそうだ。もしかしたら人家があるのかもしれない。考え込む前に、光に向かって歩き出していた。

しばらく歩いたが、赤い点との距離は一向に縮まらない。やっぱり止めようか。立ち止まった。それじゃどうする、さっきのところに戻るのか？とにかくこの道をいけるだけ行ってみよう。冷え切っていた体も、わずかながら温かくなってきていた。動いているほうが寒さには勝てる。再び、しかももつと大股で歩き出した。

周囲は一面の暗闇だと思っていたが、歩き進むにつれて道の両側の雰囲気、なんとなくわかってきた。枯れきった草叢か雑草の生い茂っていた畑の間を進んでいるようだ。何者にも遮られない風が頭髮を揺らし、その数本が額に張り付いている。手袋の中で指先が溶けて緩みはじめている。

どれくらい経つたろうか、赤い光は次第に形を現してきた。提灯のようだ。掘っ立て小屋なのか、その光に接するように立つ、四角い形をした黒い塊も浮かんで見えた。その周りには、しかし他に何も見当たらない。

道はさらに続く。明かりに向かつて一直線ではないが、道に沿って進んでいくと、左手前方にそれは次第に近づいてきた。黒い塊も姿を明らかにした。やはり小さな小屋だった。バスを降りたところにあつたあばら家よりももっと小さい、でも風に歯向かつて敵として立っている。

途中から道はずれ、枯れ草の中を赤提灯に向かつて一直線に進んだ。土の感触と乾いた雑草が足に絡みつく。

近づいた小屋は、木の板を打ちつけてできていた。こちらに面した側は、くもりガラスの引き戸になっており、中の灯りが淡くぼんやりと漏れていた。檜の皮で葺いた屋根の軒先には、何も書いてない赤一色の提灯がぼつんと一つ、少しばかりの風には悪戯されないようにしっかりと括り付けられていた。

耳のそばを通り過ぎる風のせい、中からの物音は聞こえてこない。こんな時分、誰も通らないこの枯れ野原の中で、一杯飲み屋でもあるまい。でも、明かりがついているからには人気はあるのだろう。いったいどんな人が、何のために……。

考えている余裕は無かった。立ち止まっている間にも、時おり吹く風で、わずかばかりの汗が、体温を夜気へ急速に連れ去り始めていた。くもりガラスの戸に手をかけた。

中は思った以上に明るく、小屋いっぱいには広がっている煮物のおいが、ふわっと全身を襲い、気持ちや和らげてくれた。L字型のカウンターに沿って並べられた5、6脚の丸椅子は、整然と等間隔に置かれている。カウンターの間には、おでんの湯気なのだろうか白いもやが、温かそうに漂っていた。客の姿はどこにも無かった。

後ろ手で戸を閉めながらその奥に目をこらすと、乳色の湯気の向うに女性の姿が白く浮かんで見えていた。女はいきなりの侵入者に驚いた風もなく、優しいな眼差しでこちらを見ている。その顔はすぐに頬笑みに変わった。湯気を通して見える白い顔は、割烹着の色

からも柔らかかそうに浮き上がって見えた。少し面長だがふっくらと整った頬だ。切れ長の目に黒く輝く瞳は、まるで二十歳の乙女を感じさせるのに、少し下がった目じりからは、成熟した女の包容力を感じる。形のよい耳朶からなめらかにのびたうなじが、後ろに束ねた黒髪とともに、着物に包まれた肉体をつなげていた。

「いいですか？」

立ったままでいることに気づいた私は、ひき付けられるように女将の姿を見つめたまま、答えが返ってくるのを待たずに、近くの丸椅子に近寄った。

「どうぞ。」

女将はそのまま姿勢を変えずに、微笑みを含んだすずやかな声で応えた。助かった。でも明日の朝までここで飲み続けさせてくれるのだろうか？とにかくできるだけ粘らなければ・・・。

あまり広くないカウンターの向うにはおでんが、おだやかな音を立てて煮えたぎっていた。ガンモ、こんにゃく、里いも、大根、ちくわ、はんぺん・・・。親しみのある具が、それぞれ勝手気ままに顔をのぞかせ、細かく律動しながらも、あつたかそうな煮汁の中で出番を待っていた。

熱燗を飲みながら、おでんを見繕ってもらっている間、女将の背後に目を転じた。そこには古びた茶箆筥がひとつ置いてあるだけだ。中には茶碗や皿、グラス等の食器類が入っているらしい。外から見たこの家の小ささからすると、その奥はもう、荷物をチョット置く程度の隙間しかないはずだ。

それにしても板張りの粗末な造りの小屋のわりには温かい。おでんの湯気のせいかな、女将のかもつ雰囲気のせいなのか。

「外は寒かったですよ。」

おでんをたっぷりのせた皿をさし出しながら、女将は再び私の顔に微笑みかけた。あまり高くない鼻梁が、親しみを感じさせる。盃を置いた右手をそのまま伸ばし、ふっくらとした指から受け取った。白い手首には、割烹着の袖口のゴムが少し食い込んでいる。

目の前の器からほの上がる食べ物の湯気の香りを吸い込むと、やっと安堵感に包まれた。「いやー、参りました。間違った最終バスに乗ってしまって・・・。慌てて降りたんですが、何も無いところで・・・。この明かりが見えたときは、心底ほっとしましたよ。助かりました。」

相手の情に訴えて、何とかして明日の朝まで居座らせてもらいたい。演技力には自信が

無いけれど、肩をすくめたり額にしわを寄せたりして、できるだけ情けなさそうな所作を加えた。

「まあ、それは大変でしたね。こんなところでよろしかったら、どうぞごゆっくりなさっていただきます。夜が明けて明るくなれば、すぐにお乗りになるバスも参りますから。」女将はチョットだけ驚いた表情を作ったが、こちらの意図を十分に汲み取ってくれていた。見透かされたというところさの恥ずかしさは、全幅の安心感ですぐに取り除かれた。心の中の凍えた部分が溶けて、周りの空気になんかでいった。

温かいおでんをつつきながら、チビリチビリと酒を飲み、ポツリポツリと女将と言葉を交わした。独り暮らしのアパートでは、味わうことの無い安らぎを感じた。こんな世界もあるのだ。静かで落ち着いて、穏やかに、ただ時が過ぎるのを待つだけでよい。

「どんなお仕事をなさってらっしゃるのですか？」

「営業のサポートなんです。お客さんとの折衝で、営業マンが不得手な技術的なところをフォローしてやるんです。」

「それじゃあ、専門知識がおりなのですね。大変でしょうがやりがいのあるお仕事ですね。素敵ですね。」

「いえ、そんな立派なものじゃありません。頼まれたことをやってればよいだけです。会社の中では上下関係とか、他部署とのバランスさえうまくやれば……。自分が本当にやりたいことや、やるべきと思っていることをやられるんらいいでしょっけどね。周りのテンポに合わせて、指示されたことをやりながら、自分の考えたことをやるうとするよ、一日二十四時間じゃ全然足りないんですよ。結局、目先の仕事を片付けて、後は適当にあわせるだけの毎日ですよ。」

接待で飲んだ酒が、少し戻ってきた。盃を持ったまま、手をカウンターに置き、現実の世界との間を行きつ戻りつしている自分を、他人事のように観察している自分がいた。

社会人になって二十数年間、私のやってきたことは一体なんだったのだろう。商品設計をしていた若いうちに認められ、企画から生産までを担当するリーダーに抜擢された。華やかで、仕事も楽しく、やりがいも感じていた。しかし、人より早く課長になって数年後、会社の経営がおかしくなり始めた。所属していた部署が統合され、人員整理も大々的に行われた。あおりを食って転属された今の部署も、心を決めればそれなりに面白く楽しいところではある。

しかし今に至るまでの長い間、自分は何をしてきたのだろう。あの賑々しかった若いこ

るだって、自分だからこそこれができたと言うものがあつただろうか。ほとんどは上から指示されたことを、部下たちを動かして、他部署と協力しながら企画し提案し作り上げ、結果として成果が上がり……面白くはあつても、最初から自分の意思を反映して創り上げたものは、何も無かつたじゃないか。まして今の職場では、お客に右顧左眊して動かなければならない。夜中や休日に呼び出されることもしょっちゅうだ。その先には部長の椅子が待っているかもしれないが、人並みの家庭と言うものはまだ無い。女と真剣な付き合いをしている暇だって、ありやしなかつた。

外で少し強い風が吹いたのか、戸のガラスがガタカタと音を立て、露のしずくが数滴、筋を引いて落ちていった。湯気に満たされた小さな小屋の中は、カウンターに沿った丸椅子が、私が座つた一つを除いては相変わらず空のまま、両側に並んでいる。おでんも最初の時と変わりなく、ぶつぶつ音を立て、寄り添いながら動いている。

「ご立派なお仕事をなさつてるじゃないですか。楽しくお仕事できることが、充実した生活だと思えますよ。」

女将の声は、もの静かで柔らかかつたが、妨げるものがない二人だけの空気の中で、はつきりと伝わってきた。

「でも何も残ってないですよ。昔設計したヒット商品も、苦勞して作り上げた組織も……。今じゃ黒衣みたいな仕事だしね。普通この歳になったら、少なくとも家庭とか技術力とか、託せるものがあるんでしょうが、私にはそれもない。冷静に考えると、人生を間違つたのかもしれないね。」

「人生つて人それぞれだつて言いますよ。お客さんのお話、私にはとつてもうらやましい生き方に思えます。だつていくら立派なものでも、いつかは消えて新しいものにとつて代わられていくんですから。一時でもそういうことにたずさわれたつてことは、素晴らしいじゃないですか。家庭だつて知識だつて人それぞれ、かえつてそれが邪魔になる方もいらつしやるくらいですよ。」

酔いがしんしんと、頭の奥に沁み込んでくる。それにつれて女将の声は、体の中に心地よく響いた。私の心を繕ってくれようとしている人が、目の前にいる。

外の闇で隔絶された狭い小屋の中で、息づいている足つた二つの生き物、女将と私。やわらかく快い雰囲気壊すリスクと、大きな幸せを切り開くことになるかもしれないチャンスが、今ここに横たわっている。それはすぐ目の前に、手を伸ばせば触れることができるところにある。

カウンターの向こう側で緩やかに動く白い姿、その割烹着の中にくるまれた優しく柔らかな肢体に想いを絡ませた。二人の間に横たわるカウンターの一枚の厚い板の存在が、私自身を律する邪魔な手助けをしていた。

「あなたのご家族は？こんなに遅くにまでお店をやってたら大変でしょうに。」
そろそろ回りにくくなった舌で、心の中の赤い扉が、チャンスを求めて、距離感を埋めようと動きはじめた。

「私は独り身ですから・・・。」女将は短く答えた後、気がついたように言葉をつなげた。「それでも毎日、こつしてお寄りいただいたお客さん方からいろんなお話が伺えて、結構楽しく過ごしています。皆さんそれぞれ一生懸命に生きてこられて・・・。」
「自分では気がつかれないところで、それなりに素晴らしいことをなさってらっしゃるんですね。通りすがりに会った私にさえ、それだけの気持ちを起こさせてくださるんですから。」

赤い扉の動きがにぶった。私もそんな通りすがりのお客の一人に過ぎないのか。温かく迎えてくれていい気分にさせてくれただけなのか。カウンターの向うが、河の向こう岸のように遠くなった。

人の気持ちなんてと思ってきた。何時も前だけを向いて進んできた。周りのことや、過ぎたことは、振り返らないように、心がけてさえしてきた。

静かに、しかし大きく、私の中で何かが崩れていった。そしてその陰から、別の何かが浮かんできた。

子供のころ、私のちょっとしたことで喜んでいた今は亡き父と母の笑顔、学生のころ、互いに悩みを打ち明けあい鼓舞しあった友人たち、成果を挙げさせてやった時の、うれしそうな部下の姿・・・。そんな懐かしい姿影が、ポツリポツリと目の前に現れてくる。

五体の隅々までを気だるくしてくる酔い心地と、芯まで沁みこんでいる温かさのため、脱力感が全身を包み込みはじめていた。ウトウトとした気分、私は上体をカウンターにあずけた。厚い木の板のざらざらとしたぬくもりが、頬から伝わってきた。

朦朧とした意識の中で、女将の姿なのだろうか、ぼんやりとした白い影が、カウンターを越えて私に近づいてくるように思えた。その白いものは次第に大きく広がり、やがて私の体全体を包み覆った。ふんわりとした白い真綿雲のような中で、自分の体がなかにしみこみ溶けていくのを感じた。

翌朝、まだ薄暗い駅前ロータリーの角で、歩道の縁石に頭を打ち付けたまま倒れている

私の屍体は、始発電車に急ぐサラリーマンに見つけられた。私の体の上には、昨夜から降りだした春の雪が、薄く積もり始めていた。